

カリタス女子中学校 第四回入学試験

二〇二二年二月三日 実施

国語問題

(五〇分)

*答えはすべて解答用紙に記入すること。

*字数の指定がある場合は、句読点や記号をふくむこととします。

一 次の①～③の——部の漢字をひらがなに改め、④～⑦の——部のひらがなを漢字に改めなさい。ただし、④～⑦で送りがなを必要とするものについては、送りがなも書くこと。

- | | | | | | |
|---|---------------|---|----------|---|-------------|
| ① | 沿道に群がる人たち。 | ② | 次世代を担う。 | ③ | 罪を裁く。 |
| ④ | 金メダル選手のしゅくが会。 | ⑤ | きてきを鳴らす。 | ⑥ | いとこの家をたずねる。 |
| | | | | ⑦ | 知性がそなわる。 |

次の文章を読み、後の問いに答えなさい。※のついた言葉には、文章の最後に注をつけてあります。

人間という動物は、そもそも自然界では非常に弱い存在です。道具がなければ狩りもできないし、毛が生えていないので寒さにも弱い。自然に対して働きかけ、環境を変えていかないと生きていけない、特殊な動物であるといえます。

弱者である太古の人間にとって、**A** 自然は、水や食料を与えてくれる慈悲深い母のような存在である一方、突然の天災や天敵が無慈悲に命を奪っていく、悪魔のように残酷な存在でもありました。このように、わけのわからない、あまりにも大きすぎる過酷な世界を理解するために人間が生み出したのが、神様であり、神話であり、原始宗教であったのでしょうか。それらによって、自分たちが生きている世界を秩序立った意味あるものとして理解してきたのです。

自然界で弱い存在だった人間は、神様、神話、宗教を作り、自然に働きかけ、道具によって強さと生存能力を高めました。「毛のない裸のサル」という弱い存在は、自然界での生存戦略上、有利に働きました。人間は、進化しなければ生き残れない動物だったのです。道具は武器となり、猛獣と互角以上に戦うことを可能にしました。そして、宗教を核とした集団生活と狩猟によって、安定した生活を獲得しました。**C** 生存のためのハードパワーを与えてくれたのが武器であったとしたら、ソフトパワーは宗教であったのです。

その一方で、人間は言語を獲得することによって、自らの存在を反省することになりました。つまり、自らに疑問を抱き、自らに回答を迫るようになったのです。言語の獲得は、生き延びるために様々な困難を解決するには好都合でしたが、その一方でほかの動物にはない、自身は必ず死んでしまう存在だという意識を持ち、なぜこの世に生まれ、なぜ誰もが死ななければならないのかという問いを持つことになりました。

生まれた以上、体は必ず衰え、死にいたりします。生きるということは、日々死んでいくことであり、地震や津波、暴風雨、雷などの自然災害は突然襲ってきます。それまでは飲食に困らなかつたのに、ある日から日照りや干ばつに襲われる。狩りに出てまったく獲物が得られない。家族や友人が、突然病氣や事故で死んでしまう。自分自身に何がおこるのか、誰にもわからない。人間には、コントロールされた安定的な運命はなく、生きるということは、死の絶対性を前提としているのです。

人間は、一般的な動物から離脱することによって、自然を変化させる力、都合のよい環境世界を作る力を手に入れた代わりに、どうし

ようも ^bない死と無意味さを引き受けなければなりません。死への不安、コントロールでき ^cない恐怖、不幸を飼 ^dい馴らし、筋道をつけ、理解可能なものにしたのが、神様、神話、宗教なのです。

天候不順、川の氾濫、地震などの自然災害の因果関係を考え出すことで、意識のうえではわけのわから ^dない恐怖から逃れることができた。さらには、祭儀や供犠などによって神様や自然に影響を与え、コントロールすることを目指したのです。

古代の人々は、混沌とした自然を分類することで人間の世界へと引き寄せました。ここに文化人類学者のレヴィ・ストロースが命名した〈野生の思考〉の発動がみられます。神様という架空の人格的なシンボルであるキャラクターの原型は、ここから生まれたのです。

キャラクターのご先祖様を考えるうえで気をつけなければなら ^eないのは、一神教と多神教の違いです。おそらく、原始の宗教は多神教でした。各地の神話の神様は一神教の絶対神ではなく、^D知[□]能[□]でもなければ、^E老[□]死[□]でもありません。ギリシア神話の神々に顕著に表れているように、嫉妬や欲望など人間と同じ欠点を持っています。

¹、北欧神話の神々の黄昏では、怪物と神々は相打ちで死亡し、世界は一度終焉を迎えます。『古事記』などで語られる日本の神様も、人間と変わりなく生まれ死にます。キャラクターのご先祖であった神様は、これら多神教のほうの神様なのです。

自然は、人間が住むのに都合のよいように変形されてきました。そのプロセスは、古代から現代にいたるまで、以下のように ^F三つの自然に分けて構造化することができます。

まず第一の自然とは、素朴な物理的世界としての自然、野生の自然です。「毛のない裸のサル」として非常に弱い存在だった人間は、言語記号、道具を操り、野生の自然に働きかけることによって、第一の自然から離脱しました。

神様というキャラクターは、第一の自然から離脱したときに生み出されました。²、人間が自身の想像力と言語記号によって、人間にとって住みやすい新たな自然を生み出していったからです。

その結果、第二の自然が生み出されていきました。第二の自然とは、ダムを作り、建築物や道路を作り、都市を作ることによって、人間が変化させてしまった人工的な自然です。現代日本において、手つかずの自然を生きる環境とする人はほとんどいません。たとえば、道路はあらゆる場所に作られていますし、まったくの自給自足で工業製品を使わずに生きていくことはできません。

第二の自然においては、神様であったキャラクターは世俗化し、娯楽のための親しみやすい絵画やアニメ、漫画、物語、ぬいぐるみや

人形などの人工物として製作されるようになります。

そして、第三の自然とは、メディア世界、デジタルな情報世界における仮想的な自然です。もはや、ビルやダム、高速道路といった物理的な人工的製作物だけではなく、デジタルなディスプレイの中にある世界が、自分の生きる世界（＝自然）だと感じている人が現れています。

繰り返すように、キャラクターのソースコード（源泉）は、第一の自然である野生の自然、つまり山、川、湖、森、動植物などです。これらが変形されて創造されたのが、原始宗教の神々です。古代より、キャラクターは、記号の引用と変形、合成によって創造されてきたのです。また、一神教に比較すると多神教のほうが、キャラクターのベースとなる素材が豊富です。キャラクターは、小さな神様の近代的な姿であり、世俗化した宗教的シンボルともいえましよう。

キャラクターの起源は、複雑な自然を飼い馴らし、理解・コントロールできる対象とみなすために、自然を擬人化して創造した、神様なのです。特に日本の神様は、一神教のような絶対的存在の神ではありません。ちよつと超自然的な力は持つけれど、はなはだ人間に近い、両義的で曖昧な存在です。

現代においては、三つの自然の重なりの中で、キャラクターが世界と人間をつないでいます。キャラクターの媒介によって、三つの自然は厳しさを和らげ、中和されていますが、特に心理的な側面、感情的な側面をケアする、観音様やお地藏様のような存在なのです。

キャラクターを創造する際に使われることが多いのは、犬や熊、アヒルといった動物です。動物や植物をシンボル（何かを象徴する記号）として利用することは、神話の時代からあったことです。こうした人間を、ドイツの哲学者エルンスト・カッシーラーは「animal symbolicum（象徴を操る動物）」と呼んでいます。それは、動物が本能や感覚によって世界にかかわるのに対して、人間は意味を持つシンボル体系を創り、世界にかかわっていくという意味です。それがだんだん発展するにしたがつて、様々な地域で土俗信仰や民話が生まれ、妖怪、精霊、悪霊といった百花繚乱のキャラクターが、私たちの世界に生まれてきました。

3、集落に昔からある大きな木のことを、自分たちを守ってくれるシンボルであると理解することで、不安を和らげることができると。獣だつて自分たちを襲うだけではなく、生きるための術や知恵を運んできてくれると考えることで、恐ろしいだけの存在ではなくなる。特に強いパワーを持っていると信じられる動物は、それ自身が神様として信仰の対象にもなります。お稲荷様として親しまれている

狐きつねは、その一例でしょう。

人間と世界をつなぐ媒介者として典型的な存在はウサギでしょう。世界中の神話や民話の中で、ウサギはトリックスター（神と人間の間をつなぐ存在）として登場しています。ウサギというただの動物を媒介することによって、私たちは超自然的なものともつながることができるようになります。言い換えるならば、人間は世界で孤立こりつした存在ではないと理解するようになるのです。

〈青木貞茂『キャラクター・パワー ゆるキャラから国家ブランディングまで』（NHK出版新書）より〉

〔語注〕

※ 互角こかく……………おたがいの能力が同じ程度で、差がないこと。

※ 死の絶対性……………「絶対」には「他の何ものにも制限されない」という意味がある。「死の絶対性」は、「何があっても必ず死んでしまうこと」を意味している。

※ 供儀くぎ……………おそなえ物やいけにえを、神様や霊れいにささげること。

※ 混沌こんとんとした……………すべてが入り混じって区別がつかない様子。

※ レヴィーストローズが命名した〈野生の思考〉…未開人の考え方は必ずしも、遅れたものではなく、〈野生の思考〉として価値があるとした、レヴィーストローズの考え。

※ 絶対神……………ある一つの宗教における、一人だけの神様のこと。

※ 顕著けんちよに……………きわ立って、目につく様子。

※ 世俗化せぞく……………神聖で特別なものではなくなり、世の中にふつうに存在するものとなること。

※ 超自然ちよう……………事象が自然界の法則をこえていて、筋道を追って説明することができないこと。

※ 媒介ばい……………両方の間に立って、なかだちをすること。

※ 土俗信仰しんとう……………ふつうの人々の日常生活の中にある信仰のこと。山や水などの自然を信仰の対象としていることが多い。

※ 百花繚乱ひゃっかりょうらん……………優れた業績や人物が一時期にたくさん現れること。

問一

1 3 にあてはまる言葉としてふさわしいものを、次のア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。
ただし、同じ記号は一度ずつしか用いないこととします。

- ア なぜなら
- イ また
- ウ しかし
- エ つまり
- オ たとえば

問二

A 自然 とありますが、太古の人間にとって、自然とはどのような存在だったと本文では説明されていますか。正しいものを次のア～オの中からすべて選び、記号で答えなさい。

- ア 神様や宗教のような存在
- イ 水や食料を与えてくれる存在
- ウ 自らの存在を反省する存在
- エ 寒さに弱く、非常に弱い存在
- オ 悪魔のように残酷な存在

問三

B 「毛のない裸はだかのサル」とありますが、これは何を指していますか。本文中から一語でぬき出して答えなさい。

問四

C 生存のためのハードパワーを与えてくれたのが武器であったとしたら、ソフトパワーは宗教であった とありますが、これを参考に、次のア～カの言葉を、「ハードパワー」を与えてくれるものと「ソフトパワー」を与えてくれるものに分け、記号で答えなさい。

- ア 厳しい忠告
- イ 遠くを見る双眼鏡そうがんきょう
- ウ 空腹を満たす食べ物
- エ つきることのない愛情
- オ 豊かな知識
- カ やわらかい毛布

問五

波線部 a～e はいずれも「ない」という語ですが、一つだけ、他の四つと用法が異なっているものがあります。それを記号で答えなさい。

問六

D 知能、 E 老死 の二つは、一字目と三字目(部分) に同じ漢字を用いる四字熟語です。それぞれの に入る漢字を答えなさい。

問七 F 三つの自然 についての説明文として正しいものを次のア〜カの中から二つを選び、記号で答えなさい。

ア 第二の自然から離脱したいと考えた人間が、神様のことを人間にとって身近な存在にした。

イ 自分が生きる世界はデジタルな世界だと考えた人間たちが第三の自然を作り出した。

ウ 第一の自然にいた人間が、より住みやすい世界を作った結果、第二の自然が生まれた。

エ 現代では、第一の自然と第二の自然はもう残っておらず、第三の自然に人間は生きている。

オ キャラクターは、第三の自然においてデジタル化、情報化され、大きく発展している。

カ 第二の自然において、キャラクターは親しみやすい人工物として製作されるようになった。

問八 G 両義的で曖昧な存在です。とありますが、この部分の主語を明らかにした上で、どのような点が「両義的」なのか説明しなさい。

問九 なぜ人間は「神様」や「キャラクター」を作ったのでしょうか。その理由を、本文全体の内容をふまえ、八十字以内で説明しなさい。

【下書き用】

次の文章を読み、後の問いに答えなさい。※のついた言葉には、文章の最後に注をつけてあります。

中学三年生のとき、夏紀なつきと希美のぞみは同じクラスだった。南中は一学年が四クラスだったから、同じクラスになったことのない子もたくさんいた。そのころの夏紀のメイン友達は帰宅部や軽音楽部の子が大半で、希美や優子※ゆうこはサブ友達くらいの感覚だった。そこまで多くしゃべったことはないけれど、友達の友達くらいの認識にんしきは互たがに持っている。二人きりになったら普通にしゃべることはできるけれど、だからといって一緒に遊びに行ったりはしない。そのレベル※。みぞれに至いたっては、存在すら知らなかった。多分、高校で吹奏楽部すいそうがくに入らなければ、ずっと知り合わなかっただろう。

正直に言えば、中学時代の夏紀は部活を熱心にやっている人間を毛嫌いけざりしていた。『熱血』とか『根性』なんて時代遅れだとで嗤わらうタイプだった。体育祭も合唱コンクールも面倒めんどうだと思っていたし、結果がどうなるうとどうでもよかった。

逆に、希美は学校行事に熱心に取り組むほうだった。ちゃんと練習していない男子を注意し、学校を休みがちな子にもこまめに声をかけていた。

「部長」

部活外でも、希美はそう呼ばれていた。その肩書きかたがは彼女のかのじょような人間にふさわしいと夏紀は思っていた。吹奏楽部の部長、クラスの人気者。そんな希美を自分が目で追うようになったのは、中学三年生の冬。体育の授業中に設けられた休憩時間きゅうけいがきっかけだった。

夏紀たちが通っていた南中では、毎年一月の第三木曜日に大縄跳び大会おおなわとびたいかいが開催かいさいされることになっていた。クラスごとに男女に分かれて大縄を跳び、回数を競い合う。優勝したからといってとくに賞品があるわけでもなく、得られるのは名譽めいよだけだ。

こんなことを一生懸命けんめいやって何になるといえるのだろう。グラウンドの隅すみで座り込んでいるイラスト部の女子数人を眺めながら、夏紀は大きいため息をついた。水筒すいとうのキャップをひねり開け、中身を口へ注つごうとする。希美が話しかけてきたのは、まさにその瞬間しゅんかんだった。

「夏紀は大縄跳び嫌い？」

間近で声をかけられ、夏紀はとっさに水筒から口を離はなした。危あやうく中身をこぼすところだった。

「べつに、嫌いやいってワケちゃうけど」

内心の動揺どうぶようを隠かくしながら、夏紀は平静へいぜいを装まもって答える。グラウンドの隅には、ほかの生徒も荷物を置いていた。脱水症だつすいししょう対策で、体育

の授業中の水筒の持ち込みは許可されていた。

「つてかなんなん？ 突然」

あのときの自分に^①そんなつもりはなかったが、もしかしたら警戒心^{けいかいしん}が態度に出ているのかもしれない。希美は吹奏楽部の友人たちと一緒にいるのが常だったから、なぜわざわざ短い休憩時間に自分に声をかけてきたのか不思議だった。

夏紀の問いに、希美はニカツと白い歯を見せて笑った。学校指定の青色のジャージの胸元には『傘木』と名字が刺繍^{ししゅう}されていた。

「べつに突然じゃなくない？ うちが夏紀にしゃべりかけたらあかん？」

②「そんなつもりじゃないけど、びっくりしただけ」

「びっくりさせるつもりはなかってんけどなー」

眉尻^{まゆじり}を下げ、希美は頭の後ろをかいた。そうだろうな、と夏紀は思う。希美は何か企み^{たくら}を持って行動するようなタイプじゃない。だからこそ近づきたいな、とも思う。彼女から放たれる陽のオーラは、長時間直視するにはまぶしすぎる。

「夏紀さ、いっつも大縄跳びの時間、不機嫌^{ふきげん}な顔してるやん」

「べつに、^③そんなつもりはないけど」

「えー、絶対嘘^{うそ}！」

返事を待っているのか、希美はじつとこちらの顔を凝視^{ぎょうし}している。夏紀は水筒の飲み口を指で拭^{ぬぐ}うと、そのまま一気に中身をあおった。やかんで作った麦茶は、家の外で飲むと普段^{ふだん}と味が違う気がする。

「大縄跳びっていうより、団体競技^{たいたいけいぎ}が嫌^{いや}やねん」

「なんで？ みんなで協力してるって感じるやん」

「みんなであって考え方がキモい。できひん人間が悪いみたいな空気になるのが嫌」

先ほどの練習でもそうだった。運動が苦手なイラスト部の女子たちは、何度も縄に引つかかっていた。ミスした子は繰り返して「ごめんなさい」と謝り、そのたびに周りの女子たちが「いいよ」とか「気にしないで」と声をかける。とくに希美はフォローに力を入れていたと思う。空気が悪くならないように、ミスした子が落ち込まないように、多くの子に声をかけて部長らしい気遣い^{きづかい}を見せていた。

ああ、自分に声をかけてきたのもその一環^{いっかん}なのか、と夏紀は腑^ふに落ちた。希美はクラスメイトの苛立ち^{いらだ}を察し、不和の種を取り除きに

来たのだ。

「うちはクラスの雰囲気、そんなに悪くないと思うけどなあ。和気 D って感じやん、誰かがミスっても責めへんし」

「いや、空気がいいとか悪いとか、そんなんはどうでもいいねん。ただ、ミスした子が毎回謝らされてるのが不愉快」

「べつに誰かに謝らされてるわけじゃない？ 自分から申し訳ないって感じてるんやと思うけど」

「そもそも大縄跳びなんてもんがなければ、その子らは申し訳ないと思う必要すらないわけやん。縄跳びできひんかったら謝る？

はあ？ って感じ。数学のテストの点が悪くてクラスメイトに謝ることある？ 絵が下手くそでごめんって言う？ なんて運動になった

ら、できんことで謝らなあかんの？ 大会本番もべつにゼロ回で構わへんやろ。中学生にもなってこんなことさせられるとか、マジでしよ

うもなご」

思考を口に出すうちに、選ぶ言葉が過激になった。だが、それも仕方ない。本気でそう思っているのだから。

夏紀の台詞に、希美は少し困ったように笑った。駄々っ子をいなす大人のような、呆れを含んだ笑いだった。

「夏紀って、めっちゃまっすぐやな」

E
「喧嘩売ってる？」

「いやいや、素直にそう思っただけ。夏紀の言うことは正しいと思うよ。でも、現実にはちよつと正しすぎるかも」

「どういうこと？」

意味がわからず、夏紀は首を傾げた。希美が軽く目を伏せる。

「大勢の人間をまとめようと思ったなら、正しいだけじゃ上手くいかへんことが多いと思うねん。相手の気持ちと自分の気持ちの折衷案を ※せつちゅうあん 探っていくのが大事というか。学校の行事もそうでさ、大縄跳び自体に意味があるというよりは、そういう困難をみんなはどう受け止

めて、どう乗り越えていくかを考える訓練なんちゃうかな」

「それ、部長としての意見？」

「いや、単なるうちの意見。でも、まとめる側とまとめられる側で見え方が違うってのは、部長をやったから感じるようになったかも。

学校のルールって理不尽に見えがちやけど、悪の権化 ※ごんげ だってわけでもないんやでって」

「集団生活者っぽい意見やわ」

「夏紀だってそうやん。学校っていう集団の一員」

希美の台詞に、夏紀は眉間に皺を寄せた。それはそのとおりだが、夏紀はべつに集団の一員になることを自分から選んだわけじゃない。勝手に決められ、さらにはわけのわからないルールを押しつけられるだなんてまっぴらごめんだ。

「ぞっとする、その考え方」

「そう？ 集団に属する以上、『辞める』っていうのは最後の手段やとちは思うけど。いっぱいあがいて、ほんまに無理やって思ったときに初めて出てくる選択肢やん。最初から環境をすべて変えることなんて無理やし、まずは環境に合わせて自分を変えたほうが効率的い。続けていくうちに嫌なことも楽しく感じるようになるかもしれんしね」

もっともな台詞だ、とは思った。共感できないが、思考回路は理解できる。学校が好きだと言う人間は皆、希美のような思考をしているのかもしれない。現状に自分を適応させる能力が高い。

「希美って、めっちゃいい子やな」

「さっきの仕返し？」

「かもね」

肩をすくめ、自身のバッグの近くに水筒を置く。汗のにじんだ額を手の甲で拭い、夏紀は希美と向き合った。

「希美が心配せんでも、大縄跳びはちゃんとやるよ。不満はあるけど、台無しにしたろうと思ってるわけちゃうから」

「そこは心配してへんよ。夏紀、意外と責任感ありそうやし」

「うちのこと全然知らんのにそんなことわかる？」

「わかるわかる。さっきの文句だって、イラスト部の子たちをちゃんと心配してるから出てきたんでしょ？」

「べつに、うちが勝手にムカついただけやけど」

「それを見て腹を立てるところが、責任感がありそうって思った理由」

高い位置で結った黒髪を指で弾き、希美はフツツと笑いをこぼす。グラウンドの中央では体育教師が「休憩終わりだぞー」と号令をかけていた。休んでいた生徒たちがぞろぞろと集合場所へと移動し始める。

「ほら、うちらも行くこう」

そうやって、希美が前を指差す。夏紀がついてくることが当たり前だと思っている、無自覚な自信にあふれた声だった。抵抗するの
子供っぽく見える気がして、夏紀は素直に彼女の後ろを追いかけた。リーダーシップがあるとはこういうことか、とぼんやりと考
えながら。

〈武田綾乃『飛び立つ君の背を見上げる』（宝島社）より〉

〔語注〕

- ※ 優子・みぞれ……夏紀の同級生。
- ※ できひん人間……できない人間。
- ※ 折衷案……二つ以上の案から良いところを取り入れて作られた新しい案。
- ※ 悪の権化……ここでは「悪そのもの」のこと。

問一 A に入る体の一部を漢字一字で答えなさい。

問二 B グラウンドの隅^{すみ}で座り^こ込んでいるイラスト部の女子数人 とありますが、なぜ「イラスト部の女子数人」は「グラウンドの隅に座り込んでい」と考えられますか。その理由を、本文から読み取り、四十字以内で答えなさい。

【下書き用】

問三 ① そんなつもりはなかった、 ② そんなつもりじゃない、 ③ そんなつもりはない とありますが、それぞれ「夏紀」はどのような「つもり」ではなかったのですか。「つもりではなかった。」に続くように答えなさい。

問四 C なぜわざわざ短い休憩時間に自分に声をかけてきたのか とありますが、「希美」は何のために「夏紀」に声をかけてきたのですか。答えとしてふさわしい部分を「から。」に続くように本文中から二十六字でぬき出して答えなさい。

問五 D に入るひらがな四字を答えなさい。

E

問六

喧嘩^{けんか}売ってる？ とありますが、「夏紀」がこのようなことを言ったのはなぜだと考えられますか。その理由としてもっともふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 希美が夏紀に対し、激しい言葉で反論をしてきたから。

イ 希美が夏紀の発した感情的な言葉を、ほめてきたから。

ウ 希美が夏紀の話に、うわべだけで安易に賛同してきたから。

エ 希美が夏紀の話を真剣^{しんけん}に聞かず、笑ってごまかそうとしたから。

オ 希美が夏紀の考えは間違^{まちが}っていると、改めさせようとしたから。

問七

本文中から読み取れる「夏紀」の人物像として、正しくないものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 集団の中にいることは、とにかく面倒^{めんどう}だと思っている人物。

イ 正しい意見か正しくない意見かを、冷静に判断できる人物。

ウ 弱い立場にある人たちにも、目を向けることのできる人物。

エ 自分の意見を持ちつつ、集団に活かすことができる人物。

オ 集団の中では、気の進まないことも我慢^{がまん}して取り組む人物。

